

近世における一人称代名詞

「僕」の使用をめぐる

江戸中期の徂徠学派〈山県周南〉から

幕末の〈吉田松陰〉へ

牛見 真博

(要旨)

従来、近世における一人称代名詞「僕」の使用について言及している研究は、その用例の検討も含めて限られているのが現状である。その中で、近代以前における一人称代名詞「僕」の自覚的な使用は、幕末に始まるものとして捉えられてきた観があり、その傍証として長州藩の吉田松陰による「僕」の多用が指摘されている。

しかしながら、そうした「僕」の自覚的な使用は、さらに百年以上を遡り、すでに江戸中期の長州藩の山県周南の用例に見られる。

山県周南(一六八七—一七五二)は、十九歳で江戸の荻生徂徠に入門して古文辞学を修め、徂徠門下では最も早い時期からその薫陶を受けた。帰郷後は、長州藩校明倫館の創設時から深く関わり、徂徠が樹立した学問体系である徂徠学を藩校での教学に導入し第二代学頭を務めるなど、その継承と喧伝に努めた。その後、百二十年以上の長きにわたり、長州藩の学問・教育は徂徠学の影響のもとで展開されるに至っている。

本稿では周南による三三の用例の全てを掲げ、「僕」がどのような使用をみているか、主だった特徴について検討し、次のことを指摘した。

一人称代名詞としての「僕」は司馬遷『史記』を初出とし、周南は自ら藩の修史にも携わる歴史重視の姿勢と司馬遷への私淑から、『史記』に見られる「僕」の語を使用するようになった。また、『漢書』司馬遷伝における「僕」の多用に影響を受けたものと考えられる。周南による「僕」の使用は、謙遜の意と相手への高い敬意を旨としており、これは、「僕」は対等・目下の相手に使われたとい

う先行研究とは明らかに異なるものである。

一方、松陰による「僕」の多用は、藩内教学の祖である山県周南による使用に想を得ながらも、自らを他者に劣る存在であることを強調して表現したものである。松陰は「僕」を、内心を自由に吐露するのに相応しい語として自覚的に用いている。以上のように、松陰における「僕」の使用の内実も、対等・目下の相手に使用するという従来の見解とは異なることを指摘した。

はじめに

従来、近代以前における一人称代名詞「僕」の自覚的な使用は、幕末の頃から始まるように捉えられてきた観があり、その傍証として長州藩の吉田松陰(一八三〇—一八五九)が自身の文章で「僕」を多用していることなどが指摘されている¹⁾。しかしながら、本稿はそうした「僕」の自覚的な使用は、さらに百年以上をさかのぼり、すでに江戸中期の用例に見られることを指摘するものである。それは、同じく長州藩の山県周南の著述においてである。

山県周南(一六八七—一七五二)は、貞享四年に長州藩の儒者山県良斎の次男として周防国(現在の山口県防府市鈴屋)に生まれた。名は孝孺・文儒、通称は次公・少助、周南は号である。周南は、十九歳で江戸の荻生徂徠(一六六六—一七二八)に入門して古文辞学を修め、徂徠門下では最も早い時期からその薫陶を受けた。徂徠門下のうち太宰春台(一六八〇—一七四七)を経学面、服部南郭(一六八三—一七五九)を詩文面での継承者とすれば、山県周南は教育面での高弟として評価されている。帰郷後は、長州藩校明倫館の創設時から命名や教育課程の検討などに深く関わり、徂徠が樹立した学問体系である徂徠学を導入し第二代学

*大島商船高等専門学校准教授

頭を務めるなど、その継承と喧伝に努めた²⁰。その後、百二十年以上の長きにわたり、長州藩の学問・教育は徂徠学の土壌が色濃く存する中で展開されるに至っている。後述するように幕末期の吉田松陰が自覚的に「僕」を多用していることは確かだが、それもじつは藩内教学の祖と位置づけられる山県周南による使用に想を得たものと思われる。

自称詞の「僕」について、例えば、『日本国語大辞典』（二〇〇〇年、小学館）には次のようにある。

漢文の中では、古代から男子の、非常にへりくだった表現として見られるが、訓読されるのが一般的であった。奈良時代の訓は不明だが、平安以後は「やつがれ」が普通。江戸時代の漢文から、「ぼく」の形で、対等もしくは目下の者に対する自称の代名詞として青年・書生が使った。以後多用されるようになり、現代では、年齢に関わらず用いられるが、特に少年男子の自称として広く用いられる。また、子どもが自分を指して言うのを利用して、大人がその子に呼びかけるのに用いることもある。

「江戸時代の漢文から、……対等もしくは目下の者に対する自称の代名詞」として使われたとするのは、現在の使用に際しての理解を持ち込んだ説明であり検討の余地が多分にある。この点について本稿では、江戸時代当初における使用例から、「僕」は目上の相手に対しても使われ、相手への高い敬意を表す自称詞として用いられていたことを指摘するつもりである。

そもそも近世における一人称代名詞「僕」の使用について言及している研究は、その用例の検討も含めて限られているのが現状である。

友田健太郎「〈僕〉の忠義―吉田松陰書簡の一人称を巡って―」（『三田文学』九四、二〇一五年）は、漢語「僕」を早い段階で自称詞として

自覚的に用いたのは吉田松陰であるとして、松陰による「僕」の使用例を挙げた上での検討を行っている。

長崎靖子「人称代名詞『僕』『君』の変遷」（『川村学園女子大学研究紀要』第一八巻第三号、二〇〇七年）は、①明治以前の「僕」「君」の使用、②明治以降の「僕」「君」の使用、③女性に対する「僕」「君」の使用、の三点を、使用者・使用相手・使用意図を中心に観察しているが、このうち、①明治以前についての「僕」の使用例については、幕末の滑稽本『妙竹林話七偏人』（安政四年〜文久三年刊）を挙げるにとどまっている。

れいのるず秋葉かつえ「歌舞伎自称詞の歴史社会言語学的研究―過去から現在を見る試み―」（『ことば』三八、二〇一七年）は、幕藩体制の終焉により身分制度が崩れはじめる中で、それまで一般的には使われなかった漢語自称詞「僕」が近代的な平等関係における自己の表象として登場したと指摘している。ただし、これも「僕」の使用が幕末期に始まることを前提とした論の展開を見せている。

また、「僕」語についての考察ではないが、深井一郎「真宗談義本『御伝鈔演義』について―近世語研究（九）―」（『金沢大学教育学部紀要（人文科学・社会科学編）』第三八号、一九八九年）に、安永八年（二七七九）刊行の標題本の中に一人称代名詞として「僕」の用例が見えており、近世における使用例としては古いものになろう³⁰。

いずれにしても近世における「僕」の使用をめぐる考察は、和文脈におけるものに限られており、元来、漢文で使用されていた「僕」語の検討は、未だ十分とは言えず隔靴搔痒の感が否めない。そこで本稿は、従来の指摘よりさらにさかのぼる江戸中期の山県周南の漢文における「僕」語の使用例をもとに、漢文脈から和文脈へのつながりを視野に入れ、そ

の使用をめぐる背景と意識を考察するとともに、幕末期、人称代名詞として自覚的に「僕」語を使用した吉田松陰との関係についても論じようとするものである。

一 山県周南による「僕」語の用例

従来、幕末期にその使用が始まったと考えられてきたのとは異なり、一人称代名詞としての「僕」の自覚的な使用は、江戸中期における長州藩の儒者・山県周南にさかのぼることができる。周南の主な著作として、『周南先生文集』、『講学日記』、『為学初問』、『作文初問』などを挙げられるが、このうち一人称代名詞「僕」の用例が見える『周南先生文集』^④について見ていくことにする。『周南先生文集』の全体像は次のとおりである。

- 卷之一 (五言古十六首・七言古六首)
- 卷之二 (五言律三十首)
- 卷之三 (七言律五十三首)
- 卷之四 (五言絶句十三首・七言絶句百二十三首)
- 卷之五 (序十三首)
- 卷之六 (序十六首)
- 卷之七 (記十首)
- 卷之八 (伝三首・碑三首・墓表二首)
- 卷之九 (賛十六首・銘三首・論二首・題跋十三首・読三首・説二首・祭文四首・講義一首・策問三首・功令一首・筆語八首)
- 卷之十 (書牘四十三首)

周南は、自称詞として多くは「我」「余」「予」「弟」「吾」「吾輩」「不佞」「小子」などを用いているが、「僕」語については、主語、目的語での使用を合わせて、三三例を確認できる。

以下、抜粋の形で用例の全てを掲げた上で、「僕」がどのような使用をみているか、主だった特徴について検討していきたい。なお、【一】が詩文の序である以外は、全て書簡における使用である。同じ書簡に複数回あらわれる場合は便宜上、枝番号を付した。

【一】

…邀物先生、泛舟於墨沱河。子遷子和諸友咸会。会者十余人。……僕帰期近逼。恐再会難繼。…

物先生を邀へ、墨沱河に舟を泛ぶ。子遷子和諸友咸会す。会する者十余人。…僕帰期近く逼れり。再会の継ぎ難きを恐る。…(徂徠先生を迎え、墨田川に舟を浮かべて遊ぶに、服部南郭、平野金華らの友人も皆会し、その数は十余人に上った。…私は秋に帰る時が間に迫っており、再会の期し難いことを不安に感じていた。)

〔墨水泛舟作并序〕卷之一

【二】①

聞今之学、則自高麗白僉議頤正氏而興。益齋稼亭牧隱圃隱三峰諸儒、僕聞而知之。

聞く今の学は、則ち高麗の白僉議頤正氏より興ると。益齋稼亭牧隱圃隱三峰の諸儒、僕聞きて之を知る。

(貴国における現在の学問は、高麗の白頤正氏より興ると聞きます。李齊賢・李穀・李穡・鄭夢周・鄭道伝といった儒者については、私はあな

たからお聞きしてその存在を知りました。」

〔稟朝鮮東郭李公〕卷之九

【2—②】

僕頃受読其書。

僕頃ごろ其の書を受読す。

（私は最近、その書物を手に入れて読みました。）

〈同右〉

【2—③】

僕蓬戸繩枢、纒支風雨。

僕の蓬戸繩枢、纒かに風雨を支ふ。

（私の茅屋は、なんとか風雨をしのげるほどです。）

〈同右〉

【3—①】

僕|文辞蕪鄙、固不足瀆省覽。

僕が文辞蕪鄙にして、固より省覽を瀆すに足らず。

（私の文章は粗雑で、わざわざ批評していただくまでもありません。）

〔復小倉藤公〕卷之十

【3—②】

意執事謬聞過差之言耶。僕固非其人

意ふに執事過差の言を謬り聞かんや。僕固より其の人に非ず。

（思うにその方の大仰な言葉を、誤って聞かれたのではないのでしょうか。）

私はもとよりそのような人物ではありません。）

〈同右〉

【3—③】

前者僕不敢輒献薄技者、非徒恥拙。

前者僕敢て薄技を輒献せざるは、徒に拙を恥ずのみに非ず。

（先に私が詩を献じなかったのは、その拙さを恥じたからだけではございません。）

〈同右〉

【3—④】

僕|往時少年受学徠翁。亦嘗一修操觚之業、才弱識浅、中途屯遭。

僕往時少年にして学を徠翁に受く。亦嘗て一たび操觚の業を修するも、才弱識浅、中途にして屯遭す。

（私は若くして徠翁先生に学問を受けました。またかつて詩文の業を修めるべく努めました。が、才は貧弱で見識も浅いため、中途半端なまま挫折してしまいました。）

（劣等な私のごときは、記録するのやつとこのことまで至っております。自分で振り返ってみても愕然として、冷や汗が背に流れます。）

（劣等な私のごときは、記録するのやつとこのことまで至っております。自分で振り返ってみても愕然として、冷や汗が背に流れます。）

（劣等な私のごときは、記録するのやつとこのことまで至っております。自分で振り返ってみても愕然として、冷や汗が背に流れます。）

〈同右〉

【3—⑤】

譎劣若僕|、存録倦倦一至此乎。自顧陷然、愧汗浹背。

譎劣僕がごとき、存録倦倦一に此に至る。自ら顧みるに陷然し、愧汗背に浹る。

（劣等な私のごときは、記録するのやつとこのことまで至っております。自分で振り返ってみても愕然として、冷や汗が背に流れます。）

【4—②】

僕|老病懶惰、十余年来厭翰墨。

僕老病懶惰、十余年来翰墨を厭ふ。

（私は老病による不精のため、十余年文事から遠ざかっております。）

〔復荻生先生 代家君作〕卷之十

僕果何修為謝。

僕果して何を修め謝と為さん。

〔私ははたして何を修めることで、あなたに謝意を表しましょうか。〕

〈同右〉

〔5〕

屢言僕少年時事、及諸旧情状。

屢々僕少年の時の事、及び諸旧情状を言ふ。

〔しばしば私が若い時の事や様々な昔の状況をお話ししました。〕

〔与富春叟〕卷之十〕

〔6〕①

頃有火戒。……僕是以知其必不盜賊所為也。

頃ごろ火戒有り。……僕はを以て其の必ずしも盜賊の所為ならざる

を知るなり。

〔近頃、火災がありました。……私はこれは必ずしも盜賊の仕業ではないと思っています。〕

〔上国相桂君〕卷之十〕

〔6〕②

僕窃以是事当解嚴寬令。

僕窃に以みるに是の事当に嚴を解き令を寬すべし。

〔私がひそかに思いますに、このことは戒嚴を解除し、法を大らかにすべきです。〕

〈同右〉

〔6〕③・④

……古之賢者、詢諸芻蕘。相公明英、不疎僕言。而僕不得不效芻蕘。

古の賢者、諸を芻蕘に詢る。相公は明英にして、僕が言を疎たず。

而も僕芻蕘を效さざることを得ず。

〔昔の賢人はこれを野人に諮りました。あなた様は英明で、私の言を疎つまでもありません。しかし私は野人の考えに思いを致すのです。〕

〈同右〉

〔7〕①

僕從諸君而若渴者、是已。

僕諸君に従ひて渴するがときは、是れのみ。

〔私があなた方に従う上で強く望むようなのは、このことのみです。〕

〔与朝鮮李嚴洪南四子〕卷之十〕

〔7〕②

僕始執謁、望門若天、見人若神。

僕始めて謁を執るに、門を望むこと天のごとく、人を見ること神のごとし。

〔私が始めてあなた方にお会いした時には、天や神に臨むような心地だったことです。〕

〈同右〉

〔7〕③

筆硯相接、若唱若和、傾蓋之間、情義交至。以僕不閑於教訓、免于

罪戾。

筆硯相接し、唱ふがごとく和すがごとく、傾蓋の間、情義交々至る。

僕教訓に閑せずを以て、罪戾を免るる。

〔文事によって和氣藹々と交流し、互いに親交を深めることができましたので、私は自らの務めを果たし、なんとか責めを塞ぐことができました。〕

〈同右〉

【7】④

非僕本志。

僕が本志に非ず。

(私の本意ではありません。)

〈同右〉

【8】①

僕奉李公諸子数篇、既達記曹。

僕李公諸子に奉る数篇、既に記曹に達す。

(私が李公その他の諸子にたてまつった数篇は、すでに記録官にわたっています。)

〔与雨芳洲松霞沼〕卷之十

【8】②

僕自幼受業於家、往来長周之間。

僕幼くして業を家に受けしより、長周の間に往来す。

(私は幼くして学問を父に受けた後、長州藩内を往来するようになりました。)

〈同右〉

【8】③

僕寧有於己而然耶。

僕寧ろ己に於ぶこと有りて然らんや。

(私はむしろ、自分自身に選ぶところがあつて然るべきでしょうか。)

〈同右〉

【8】④

胡為於僕繾綣悒悒。

胡為ぞ僕に繾綣悒悒せんや。

(どうして私に厚情をかけてくださるのでしょうか。)

〈同右〉

【8】⑤

僕其何修以報二公之徳。

僕其の何れを修め二公の徳に報いんや。

(私はそのいづれを修め、お二人の徳に報いましょうか。)

〈同右〉

【9】

僕鞅掌如旅人。

僕鞅掌旅人のごとし。

(私が労するさまはまるで旅人のようです。)

〔与佐縮往〕卷之十

【10】①

僕嘗受業物先生。

僕嘗て業を物先生に受く。

(私は昔、学問を徂徠先生に受けました。)

〔復湯之祥〕卷之十

【10】②

漫録僕嘗得物先生所。

漫録は僕嘗て物先生の所に得。

(吉斎漫録の書は、私が昔徂徠先生の所で得ました。)

〈同右〉

【11】①

僕独無知人之鑑。

僕独り人を知るの鑑無し。

(私はただ人を理解する判断基準を持ち合わせていません。)

〔復雲洞師〕卷之十

〔11—②〕

僕操此為棟。

僕此を操りて棟と為す

(私はこれをもって力としています。)

〈同右〉

〔11—③〕

僕窃察禾上之撰、操持太高。

僕窃に禾上の撰を察るに、操持太だ高し。

(私がひそかに稲穂の供えを見るに、操守するところは非常に高いように思われます。)

〈同右〉

〔12—①〕

僕亦不奉一言。

僕亦一言を奉ぜず。

(私はまた一言を奉じません。)

〔与和君実〕卷之十

〔12—②〕

足下送僕序曰、

足下僕を送る序に曰く、

(あなたが私を見送る序に言うには)

〈同右〉

これらの用例から、山県周南における「僕」語の使用意識について比

較的容易に読み取れるのは、自らの謙遜による相手への高い敬意の表明である。それは、書簡相手の検討から窺える。

まず、〔1〕は師である荻生徂徠および徂徠門下での隅田川での舟遊びを詠んだ詩の序文であり、自身を取り巻く人々への敬意が示される。

徂徠への敬意としては〔4〕も挙げられる。これは、周南が病に伏せる父良斎に代わって徂徠に宛てている。父子二代にわたる師への敬意が、周南の「僕」語の使用により一層強調されている。また、〔5〕の田中桐江(一六六八—一七四二)は徂徠と親交の深かった人物、〔10〕は同志である服部南郭のもとで学んだ徂徠門下の湯浅常山(一七〇八—一七八一)に宛てたものである。いずれも、徂徠が自らの学派を表す際に「吾党の士」と用いることが知られているように、周南の徂徠に対する敬意、同志である徂徠門下への敬意が窺える使用と言えよう。

〔2〕と〔7〕は、朝鮮通信使との交流である。〔2〕の李東郭は、正徳年間における朝鮮通信使の製述官である。製述官は、特に文筆に優れた者から選ばれ、来訪の際に山県周南と盛んに漢詩の応酬をして親交を深めている。周南は、その際の漢詩を対馬藩の儒者雨森芳洲(一六六八—一七五五)に「海西無双」と称賛され、それにより師である徂徠の名も高まる契機となった。当の周南もまた、詩の応酬を通して李東郭に敬意を抱いていた。〔7〕は人物が定かでないが、文事を通して誼をつうじた相手への敬意という点は同様である⁵⁾。

〔8〕は、雨森芳洲と松浦霞沼(一六七六—一七二八)に宛てたものである。周南の才とその師である荻生徂徠について世に喧伝した雨森芳洲は、木下順庵門下の俊秀で対馬藩の藩儒として仕え、李氏朝鮮との重要な国交実務を担ったことは周知のとおりである。また、同じく対馬藩の松浦霞沼も芳洲とともに朝鮮の文人の間ではつとに高い評価を受けて

いた人物である。

長州藩内の人物では、【3】の小倉尚斎（一六七七—一七三七）、【6】の桂広保（一六八八—一七六九）、【9】の佐々木縮往（一六四九—一七三四）、【11】は父である山泉良斎（一六四八—一七二八）、【12】の和智東郊（一七〇三—一七六五）である。小倉尚斎は京都の伊藤坦庵（一六二二—一七〇八）に師事し、その後江戸へ出て林信篤の門に入り助講を務めた。正徳元年には朝鮮通信使に詩文を贈り、李東郭にその才を称賛されている。六代將軍徳川家宣も尚斎の才を高く評価し召し抱えようとしたが、尚斎は病気を理由に辞している。享保四年に萩に藩校明倫館が創設されてからは、十九年間の長きにわたり初代学頭の職にあるなど、名実ともに藩内教学の重鎮で、周南が敬してやまない人物であった⁶。

桂広保は、藩政の中枢をつかさどる当職・当役などを務め、藩主四代にわたって仕え、とりわけ藩内における文武の振興に尽力した。【6】は、家老の地位にある桂への上書的一端である。また、佐々木縮往は藩の儒者として、周南とともに正徳年間における朝鮮通信使の応接にあたり、小倉尚斎と『両関唱和集』を刊行している。和智東郊は、藩校明倫館における周南門下の高弟で、小姓として江戸詰めなどを経て、後には藩政の実務を総括する当職手元役などを務めた。滝鶴台（一七〇九—一七七三）、林東冥（一七〇八—一七八〇）とともに周南門下の三傑とされている⁷。

未だ一般的であったとは思われない「僕」を使用する相手としては、目上の相手も含め、徂徠学、古文辞学への理解を有し、あるいは周南のことをよく理解している間柄の人物であったことが窺える。また、その使用意識には、自分の存在を低いものとして位置づける謙遜の意より、むしろ相手への高い敬意の表明に重きが置かれていると言えよう。

それではなぜ、周南がこうした相手意識、使用意識に適う語として着眼したのが「僕」語だったのか。次にはその理由について検討していきたい。

二 山県周南における「僕」語への着眼

ここでは、山県周南が「僕」語に着眼した理由について、学問方法として古文辞を重んじた師である荻生徂徠との関係性から見ていきたい。

古文辞とは、明代の李攀龍・王世貞によって提唱され、宋・明の詩文を否定して、漢代以前の文体を模範としたものである。古文辞学と徂徠学とは必ずしも同義ではないが、徂徠学の大きな特徴は、朱子学および伊藤仁斎（一六二七—一七〇五）批判から照射されよう⁸。

程朱の諸公は、豪傑の士なりと雖も、古文辞を識らず。是を以て六経を読みて之を知ること能はず。独り中庸・孟子の読み易きを喜ぶや、遂に其の外人と争ふ者の言を以て、聖人の道本より然りと為す。又今文を以て古文を視、而して其の物に味く、物と名と離れ、而る後に義理孤行す。是に於いてか先王・孔子の教法復た見るべからず。近歳、伊氏亦豪傑にして、頗る其の似れる者を窺ふ。然れども其の孟子を以て論語を解し、今文を以て古文を視るは、猶之程朱の学のごときのみ。……又未だ和語もて華言を視るを免れず。

程明道・程伊川や朱熹は、宋代の言語をそれより千年以上も以前の経書にあてはめて解釈しようとするため、六経の本義を明らかにすることができないとする。徂徠と同じく反朱子学を掲げる伊藤仁斎の古学についても、「孟子」の解釈をとおして「論語」を理解しようとする学問方法を批判し、今文によって古文を理解しようとする点において朱子学と

同じであるとする。つまり、徂徠の主張は古文辞を修めた上で、古語によつて古語を理解する学問方法で原典にあたらなければ、六経の本義を理解することはできないという。

周南は師である徂徠のこうした主張に基づき、徂徠学を奉じて前漢以前の古文辞を重んじた⁹⁾。

其学一遵徂徠先生教、以經術文章為宗。文則秦漢、詩則唐明為歸。而博綜強記、無所不窺。

其の学は一に徂徠先生の教へに遵ひ、經術文章を以て宗と為す。文は則ち秦漢、詩は則ち唐明を歸と為す。而して博綜強記、窺はざる所無し。

また徂徠の学問について、周南は次のように述べている¹⁰⁾。

夫道者堯舜創焉。仲尼述焉。荀孟以下能述、而不晰其歸、聖学之旨荒矣。独我徂徠先生生於百世之後、禹跡之表、而乃能得孔子之旨、而明先王之道。孔子之学至今、而有光焉。

夫れ道は堯舜創れり。仲尼述ぶ。荀孟以下能く述べれども、其の歸を晰かにせずして、聖学の道荒ぶ。独り我が徂徠先生のみ百世の後、禹跡の表に生れて、乃ち能く孔子の旨を得て、先王の道を明らかにす。孔子の学今に至りて、光有り。

堯・舜がつくり、孔子が述べた先王の道は、荀子・孟子以降の学者がその解釈を明らかにしなかつたために荒んでしまった。唯一、徂徠先生だけが千数百年の後に生まれて古文辞により先王の道を明らかにしたのであると述べ、並々ならぬ敬意を表明している。

徂徠が自身の文章において主に用いている自称詞は、「我」「吾」「余」「予」である。先秦時期の第一人称名詞の用法については、西山猛氏が『論語』、『孟子』、『礼記』檀弓、『左伝』、『国語』の第一人称代名詞を主語、

限定語、目的語に分けて検討した結果のうち、主語としては「吾」「我」が常用され、他に「予」(余) が用いられていることを指摘している¹¹⁾。徂徠が用いる自称詞もまた、自身が重んじる前漢以前の古文辞に則つた語を用いているということになろう。それではなぜ、師である徂徠には見られない「僕」語の使用が、周南に見られるのだろうか。

それは一つには、徂徠が古文辞を通して先王の道に立ち返ろうとする自らの学問体系の正統性を、朱子学や伊藤仁斎の古学への痛烈な批判によつて喧伝するなど、対等あるいは高踏的な物言いで周囲と対峙する機会が多かつたことを挙げられよう。そのため、「僕」を用いるような相手意識、使用意識を持ち得なかつた。その点において周南とはその意識からして大きく異なる。

いま一つは、周南による歴史家司馬遷への私淑の態度である。一人称代名詞「僕」の用法の初出は、紀元前九一年頃の成立とされる司馬遷『史記』のようである¹²⁾。

『史記』において、韓信がいわゆる「背水の陣」の戦勝後に、捕らえた敵將広武君に対して敬意を表す場面で、「僕」が用いられている¹³⁾。

…於是信問広武君曰、僕欲北攻燕、東伐斉、何若而有功。…信曰、僕聞之、百里奚居虞而虞亡、在秦而秦霸。…因固問曰、僕委心歸計、願足下勿辭。…

…是に於て信、広武君に問ひて曰く、僕北のかた燕を攻め、東のかた斉を伐たんと欲す、何若せば攻有らんと。…信曰く、僕之を聞く、百里奚は虞に居りて、虞の亡びるや、秦に在りて秦、霸たり、と。…因りて固く問ひて曰く、僕心を委ね計に歸せん、願はくは足下、辭すること勿かれ、と。

捕らえた敵將の広武君に対して、韓信が敬意を表して「僕」と使用し

ている状況からは、司馬遷による「僕」の使用意識を窺うことができよう。すなわち、ここでの「僕」語は相手に対してへりくだるといふよりも、むしろ敬意の表明として用いられている。周南の「僕」の使用意識が、敬意の表明に重きを置いていることは、司馬遷に則った使用を周南が踏襲していることの証左となろう。

ちなみに、少し時代を下った建初年間（七六一―八三）前後に成ったとされる班固『漢書』の司馬遷伝（卷六十二）には、

僕非敢如是也。

など、司馬遷の一人称の言辭として「僕」の使用が二三例と多く見られることから¹⁴⁾、このことも周南による「僕」の使用を後押ししたものと思われる。

また、一人称としての「僕」の使用については、さらに六朝時代の『文選』に収められる司馬相如「子虚賦」の李善注に、

善曰、広倉曰、僕謂附著於人。然自卑之称也。

と見え、「自卑之称」として次第に定着していったことが窺える¹⁵⁾。

さて、周南が『史記』を通して「僕」に着眼した背景については、師である徂徠の『史記』への高い評価を挙げられる。無論、徂徠に限らず『史記』を評価すること自体は特別なことではない。ただ、徂徠は古文辞を重視する自らの学問方法との関連から次のように述べている¹⁶⁾。

足下以為讀史記不如讀經。是固然。然經皆為宋儒所壞。今之讀經者。皆從宋儒注解。以求聖人之道。何以能得之哉。……可謂杜撰妄說也。加之不識古言。不識古文辭。是以其所解說。言与理皆失之矣。祇史記不經宋儒之手。其時世又与三代相接。風俗氣習。不甚相遠。故不佞教人先讀史記者。亦欲其藉此以離宋儒一種惡習也。……至於史記。則長短兼具。纖悉皆有。故學者覺其不甚遠於今人。而易於感發興起

焉。是不佞所以教人先讀史記之意也。

足下以為へらく史記を読むは經を読むに如かずと。是れ固より然り。然れども經は皆宋儒の壞尽する所と為る。今の經を読むは、皆宋儒の注解に従ひ、以て聖人の道を求む。何を以て能く之を得んや。……杜撰妄說と謂うべきなり。之に加ふるに古言を識らず。古文辞を識らず。是を以て其の解説する所は、言と理皆之を失す。祇だ史記は宋儒の手を経ず。其の時世は又三代と相接し、風俗氣習、甚だしくは相遠からず。故に不佞人に先づ史記を読むを教ふるは、亦其の此に藉りて以て宋儒の一種の惡習を離れんことを欲するなり。……史記に至りては、則ち長短兼ね具へ、纖悉皆有り。故に學者其の甚だしくは今人に遠からざるを覚えて感發興起に易し。是れ不佞の以て人に先づ史記を読むを教ふる所以の意なり。

徂徠は、宋代の朱子学の解釈によって古代の經書を読むよりは、朱子學者が手をつけていない『史記』のほうが古文辞を学ぶ上でも、「感發興起」のためにもよいとして、まず読むべき書として『史記』を挙げている。

また、周南が徂徠のもとでの修業を終えて帰郷する際、師である徂徠から次のように贈られている¹⁷⁾。

……言迺千秋。雖有循吏。不有良史。是何以伝焉。故吾迺願其能為司馬氏也。古人曰。子長之文。質而不俚。文孺之為人。其斯為最近哉。故吾由次公及之。今文孺之從予学古文辞且三年。業成將歸。故書以當君子之贈。文孺其用勉之哉。

……言は迺ち千秋なり。循吏有りと雖も、良史有らざれば、是れ何を以てか伝へん。故に吾迺ち其の能く司馬氏（司馬遷）と為らんことを願ふなり。古人曰く、子長（司馬遷）の文、質にして俚ならずと。

文孺（山県周南）の人と為り、其れ斯に最も近きと為すかな。故に吾次公より之に及ぶ。今文孺の予に従ひて古文辞を学ぶこと且に三年、業成りて將に帰らんとす。故に書して以て君子の贈に当てん。文孺其れ用て之を勉めよや。

徂徠は、自分のもとで古文辞を学んだ周南に対して、門下の中でも「人と為り」が最も司馬遷に近いとし、長州に帰っても優れた史官になってほしいと激励している。周南が歴史の叙述に秀でていたことは、

最精国史治乱興衰之跡、至皇朝文物典故、諸家譜第閥閥、明如指掌。嘗奉命、与永田政純共選公室譜牒、諸臣家譜。

最も国史に精し。治乱興衰の跡より、皇朝の文物典故、諸家の譜第閥閥に至るまで、明らかなること掌を指すがごとし。嘗て命を奉じ、永田政純と共に公室の譜牒、諸臣の家譜を選す。

とあることから窺え¹⁸⁾、帰郷後は藩の修史事業にも携わり、永田政純を中心とする『萩藩閥閥録』の編述や毛利家の変遷を記した『江氏家譜』を監修している。

師の励ましは、周南による歴史家司馬遷への憧れや私淑を踏まえた上での献辞であったかも知れないが、この上ない饒となったはずである。こうした古文辞を重んじる徂徠の『史記』への高い評価、何よりも周南の歴史書『史記』に対するまなざしに基づく司馬遷の用法への理解が、一人称代名詞「僕」語に着目させ、その自覚的な使用に至らせたものと考えられる。

三 吉田松陰における「僕」語の使用意識

さて、吉田松陰における「僕」の使用について、友田氏は、『全集』

に収められる松陰の書簡六二八通のうち、二一七通に「僕」という一人称が使用されていること、さらには一人称が全く登場しない書簡も二一六通あるため、一人称が登場する書簡（四二二通）の半分以上で「僕」が使われていることを指摘している¹⁹⁾。

友田氏が指摘するように、松陰による「僕」使用の初出例は、嘉永四年（一八五二）八月十七日付の実兄・杉梅太郎宛の書簡である。江戸遊学中の松陰が在萩の兄に対して、今後学ぶべき内容を列挙するとともに、その多さに対して自分の能力の無さを自覚し心が乱れているといった内容である。書簡の最後を次のように結んでいる²⁰⁾。

僕学ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。万祈万祈。

この書簡の全体を眺めると、松陰が自らを「愚」とする意識に覆われていることを窺うことができる。前半部分には次のようにある²¹⁾。

三年の修業位にて何も出来申す間敷く、天下英雄豪傑は多きものにて、其の上に駕出仕り候事は中々愚輩の鈍才にては俄かに出来申すべくとも思はれず、我れ一步を往けば寇も亦一步をゆくの道理、況して愚鈍ものは人の十歩百歩の間に漸く一步を移し候位の事にては、三年五年には間に合ひ申す間敷く候。……何とも覚束なく候故、愚劣ながらも緩々居り候はば、何か一つどもは得申すべくやと存じ居り候事に御座候。

これに続けて、「是れ迄学問進も何一つ出来候事之れなく、僅かに字を識り候迄に御座候。夫れ故方寸錯乱如何ぞや」とまで弱音を吐露している。さらに、学ぶべき内容に話題が至る中で、

輿地学も一骨折れ申すべし。砲術学も一骨折れ申すべし。西洋兵書類も一骨折れ申すべし。本朝武器制も一骨折れ申すべし。文章も一

骨折れ申すべし。諸大名譜牒も一骨折れ申すべし。算術も一骨折れ申すべし。七書、集訟を致し候間折訟は片言にては行け申さず候。是れも一骨折れ申すべし。武道の書も説く所異同あれども一部ならず。士道要論・武士訓・武道初心集、漸く此の三部をみる。此の外何ぞ限りあらん。此れも一骨折れ申すべし。

と記し⁽²²⁾、「右思ひ出し次第に記し見候へども、何一つ手に付き居り候事は一つも之れなし」と自虐的に述べている。

書簡自体はもう少し続くが、こうした文脈の流れを承けての締め括りが、「僕学」ぶ所未だ要領を得ざるか、一言を得て而して斯の心の動揺を定めんと欲す。万祈万祈」であり、「僕」が使用されていることを強調しておきたい。

すなわち、「愚輩」「愚鈍」「愚劣」な自分をあらわす語として、「僕」を使用しているということである。友田論文において、

兄に対して〈僕〉という言葉は対等、または目下の相手に対して使われるものだからで、現在でも公式の場で目上相手に〈僕〉を使うのは、失礼とまでは言わないまでも、やや破格だと思われるであろう。儒教道徳の普及した当時ならなおさらである。

とするのは⁽²³⁾、現代的な理解を持ち込んだ誤解と言わざるを得ない。松陰はこの書簡において、兄が目上の相手であるという意識を失っていない。ただし、先に確認した山県周南による「僕」の使用意識が、自分の存在を低いものとして位置づける謙遜の意と同時に、「相手への高い敬意の表明」であったのに対し、松陰による「僕」の使用意識においては、自分を「愚」と捉えることに見られるような卑下の意が前面に押し出されている点を指摘できよう。

加えて、松陰の晩年にあたる安政六年（一八五九）になると、「僕」

の語は「狂」の意識とともに用いられていることも指摘できる⁽²⁴⁾。松陰は、弱腰な外交を続ける幕府に代わり、長州藩によって朝廷に攘夷の決起を促すために、藩主を京都の伏見で待ち伏せし、そのまま御所へ誘引しようとした伏見要駕策を画策し、これを獄中から松下村塾の門下生たちに指令した⁽²⁵⁾。

承るに、要駕策は万ならざるに期す、しかも僕の悍然としてこれを為すもの、切にその解を得ずと。嗚呼、諸君衆口一詞、以って狂策となす。しかも僕嗷々して已まず、狂上狂を添う。然れども、蓄えて洩らさずんば、鬱抑ますます甚しく、狂また狂を添えん。請う、嘗みにこれを道わん。

この要駕策を実行する気概については続けて、
狂愚、僕のごとき者あらば、また縛して、これを囚するほか、別に手段なからん。

と述べているように⁽²⁶⁾、周囲の制止に耳を傾けることはなかった。「狂」「狂愚」と自らを位置づける松陰は様々に周旋するも策を実行に移す門下生はなく、憂悶の情と孤立感を深めていく。ついには門下生たちへの憤懣を次のように述べるに至る⁽²⁷⁾。

憤懣ここに至るは僕の大病なりと雖も、自ら謂へらく、亦狂狷たる所以なりと。諸友、孔門の遺法を以て之れを恕するや、否や。
入江杉蔵に宛てた次の一節は、この時期の松陰の意識を端的に物語っているように⁽²⁸⁾。

如何如何、僕已に狂人、孔孟流儀の忠孝仁義を以て一々責められては一句も之れなし。

このように松陰が「僕」の一人称で語る内容からは、生涯を幽囚の身として過ごすことが多かったことも関係してか、自らを「愚」や「狂」

と捉え、相手よりも低く劣る存在と位置づけることで、かえって内心の自由な吐露を確保しようとしている観がある。

松陰はわずか十歳にして藩主に家学の講義を行うなど、後には藩校明倫館教授を務める立場にあった。そうした松陰が早くから、藩内教学の祖と位置づけられる周南の著作を読んでいたことは容易に推察される。実際に、松陰の「野山獄読書記」にも周南の文章を読んでいたことが確認できる⁽²⁹⁾。さらに、「丁巳日乗」には、松陰が松下村塾の門下生に對して、安政四年（一八五八）二月六日から十一日まで毎日、周南の文章を講読したことが記されている⁽³⁰⁾。

六日（吉田）栄太郎来る、為めに周南の文を読む。午後、（増野）徳民・栄太の為に周南の文を読む。

七日 栄太・徳民の為に周南の文を読む。午後、岡部繁之介来る。栄太・徳民の為に周南の文を読む。

八日 岡部繁之介来る、為めに中庸を講ず。午後、周南の文を読む、栄太・徳民が為め。

九日 岡部繁之介・栄太・徳民の為に周南の文を読む。午後、栄太・徳民の為に周南の文を読む。

十日 栄太・徳民の為に周南の文を読む。土屋弥之助来る。国司仙吉の為に礼記を読む。

十一日 徳民・栄太の為に周南の文を読む。玉木彦介も同じ。また、門下生の代表格である久坂玄瑞が選ぶ愛読書の一つとしても周南の文章が挙げられていることは⁽³¹⁾、藩内の学問として山県周南の著作がいかに重んじられていたかを窺えるという点で示唆的である。

松陰が、テキストとして周南の文章を用いて松下村塾の門下生に教えていることや、その教育論についても大きな影響を受けていることに鑑

みれば⁽³²⁾、松陰が「僕」を多用するに至った契機は、『史記』や『漢書』からというよりは、むしろ松陰から百年以上前にさかのぼった藩内教学の祖である山県周南による使用に想を得たものであろう。その際、松陰は「僕」を、周南の使用意識とはまた異なり、自らを他者に劣る存在であることを殊更に強調して表現し、それにより内心を自由に吐露するのに対応しい語として多用するに至っている。

おわりに

従来、一人称代名詞「僕」の自覚的な使用は、幕末期に始まるように捉えられてきた。しかしながら、本稿では、すでに江戸中期の長州藩の山県周南において「僕」の自覚的な使用が認められ、先行研究における言及よりもその使用についてはさらにさかのぼることを指摘した。

周南による「僕」の使用は、自身を理解してくれる間柄において、謙遜の意とともに相手への高い敬意が込められたものである。こうした使用は、一人称代名詞としての「僕」の初出である『史記』での使用が相手への敬意の表明を本旨とするものであり、それを踏襲したものと思われる。周南は、自ら藩の修史にも携わる歴史重視の姿勢と司馬遷への私淑から『史記』に見られる「僕」の語に着眼し、使用するようになったと思われる。『漢書』司馬遷伝における「僕」の多用に影響を受けたものと考えられる。

一方、幕末期に至り、藩内教学の祖である山県周南の「僕」の使用に想を得て用い始めた吉田松陰においては、自らの卑下を強調することで、かえって内心を自由に吐露することを確保するための一人称として用いていたことを指摘した。これは、生涯を幽囚の身で過ごすことが多かつ

たことによる自意識もあずかっていたことと思われ、従来の見解のように、松陰が「僕」を対等・目下の相手への一人称として用いていたと捉えることはできない。むしろそうした使用は、松陰に倣って「僕」を用いた高杉晋作や久坂玄瑞といった門下生に散見するが、それについては他日を期したい。

注

- 1 友田健太郎「僕」の忠義―吉田松陰書簡の一人称を巡って―（『三田文学』九四、二〇一五年）。
- 2 山県周南に関する先行研究は、藤井明・久富木成大『山井崑崙：山県周南』（叢書日本の思想家一八、明徳出版社、一九八八年）、若水俊「明倫館の設立と周南」（『徂徠とその門人の研究』所収、三一書房、一九九三年）、河村一郎「山県周南一面」（『長州藩思想史覚書』所収、私家版、一九八六年）、同「山県周南の教育論」（『長州藩徂徠学』所収、私家版、一九九〇年）、『山口県史』史料編・近世5解説（山口県史編さん委員会、二〇一〇年）、拙著『長州藩教育の源流―徂徠学者・山県周南と藩校明倫館』（溪水社、二〇一三年）参照。ただし、「僕」に充てられた訓は「ワタクシ」「コチ」「ワレ」である。「ボク」という訓についての検討も大きな課題だが、本稿は「僕」語自体の自覚的な使用を対象とするものである。
- 3 『周南先生文集』（山口県立山口図書館蔵）。
- 4 山県周南と朝鮮通信使との詩の応酬と親交の実際については、信原修「正徳辛卯通信使の来日と詩文唱酬の実態―山県周南と当壮菴一族を中心に―」（『朝鮮学報』第百六十二輯、一九九七年）に詳しい。
- 5 山県周南による小倉尚斎への敬意については、拙稿「小倉尚斎と山県周南―学統学派をこえた親交―」（『山口県地方史研究』九十六号、二〇〇六年）。
- 6 吉田祥朔『近世防長人名辞典』増補版（マツノ書店、一九七六年）参照。
- 7 「弁道」（日本思想大系三六『萩生徂徠』所収、岩波書店、一九七三年、一一頁）。
- 8 山県泰恒「先考周南先生行状」（前掲『周南先生文集』所収）。
- 9 「送三浦生之京師序」（前掲『周南先生文集』所収）。

- 11 西山猛『漢語史における指示詞と人称詞』（好文出版、二〇一四年、一一〇―一一頁）。
- 12 同右、一三三―一三四頁。
- 13 『史記』淮陰侯列伝（新釈漢文大系九〇、明治書院、一九九六年）、一二五―一二六頁。
- 14 『漢書補注』（上海古籍出版社、二〇〇八年、四三三―四三七二頁）。
- 15 『新校訂六家注文選』第一冊（鄭州大学出版社、二〇一三年、四六七頁）。
- 16 『与藪震菴 附答問』（『徂徠集』巻二十三、影印本、「詩集日本漢詩」第三巻所収、汲古書院、一九八六年、二四四頁）。
- 17 「次公字叙贈行」（前掲『徂徠集』巻十、九二―九三頁）。
- 18 前掲「先考周南先生行状」。
- 19 友田前掲論文。
- 20 「兄杉梅太郎宛」（『吉田松陰全集』（以下、『全集』）第七巻、大和書房、二〇一二年、八〇頁）。
- 21 同右、七七頁。
- 22 同右、七七頁。
- 23 友田前掲論文。
- 24 吉田松陰の「狂」について考察したものに、下程勇吉「吉田松陰の人間学的研究」（広池学園出版部、一九八八年）、前田愛「松陰における「狂愚」―嘉永三年から六年―」（『文学』三九（四）、岩波書店、一九七一年）、拙稿「吉田松陰における儒家的な「狂」の思想と実践―「兵学者」としての人物理解を踏まえて―」（『道徳と教育』第三三六号、二〇一八年）がある。
- 25 「福原又四郎に復す」（『全集』第五巻、一三三―一三三頁）。
- 26 同右、一三四頁。
- 27 「小田村士毅に寄す」（『全集』第五巻、二九四頁）。
- 28 「入江杉蔵宛」（『全集』第八巻、二五二頁）。
- 29 「野山獄読書記」（『全集』第九巻、四四五頁）。
- 30 「丁巳日乗」（『全集』第九巻、五〇〇頁）。
- 31 久坂玄瑞の「愛読書籍目録」に、山県周南による「海北君神道研」が挙げられている（『久坂玄瑞全集』所収、マツノ書店、一九九二年、七三五頁）。
- 32 拙稿「吉田松陰と徂徠学の教育論―長州藩における学問的風土の影響―」（『日本歴史』七三六、二〇〇九年）。